

自己愛傾向と安心さがしが友人関係における適応的側面に与える影響

清水健司（信州大学人文学部）

清水寿代（広島大学大学院教育学研究科）

キーワード：自己愛傾向，安心さがし，反映的自己評価，居場所感，他者依存性

The Effect of Narcissistic Personality and Reassurance Seeking on Adaptability of Friendship

Kenji, Shimizu (Faculty of Arts, Shinshu University)

Hisayo, Shimizu (Department of Education, Hiroshima University)

Key words: narcissistic personality, reassurance seeking, reflective self-esteem, sense of Ibasho, interpersonal dependency

要 約

本研究の目的は、自己愛傾向と反映的自己評価との個人的資質を持つ青年たちが、重要他者（最も親しい同性の友人）に対して試みる安心さがしによって、居場所感や他者依存性といった友人関係における適応性に、どのような影響を及ぼすのか検証することであった。

その結果、自己愛傾向が高く、反映的自己評価が低い人々、つまり自己像において肯定的評価を維持したいとの強い動機づけを持ち、重要他者でさえ自分のことを高くは評価していないとの疑念を持つ人々は、安心さがしを行うことで友人関係にて更に不適応的になることが示された。ただし、自己愛傾向が低く、反映的自己評価が高い人々、つまり自己像において肯定的評価を維持することにさほど執着するわけではなく、重要他者から高い評価を受けているとの信頼感を持った人々は、安心さがしをすることで一定の自己存在の確認作業ができていた可能性が示された。

問題・目的

自分という存在に何も価値が見出せないという主観的体験は、当該個人の生理的・心理的・社会的側面に対して少なからず悪影響を及ぼし、日常生活における様々な苦痛の種にな

り得るものである。あの独特の嫌悪的感觉を多少でも知る者であれば、誰しも何とかして回避したいと思うのが本音ではないだろうか。出来ることならば、自分に対して常に何らかの価値を見出し、不安を伴う嫌悪的感觉に身を晒すことなく、安定的かつ持続的に肯定的な自己像を維持していきたいと考えるのはごく自然なことである。

ただし、アイデンティティ確立との苦闘を強いられる青年期においては、これは望むべくもない願いなのかもしれない。青年期は、自分の存在意義や潜在的な可能性に一定の目途をつける時期でもあるため、度重なる失敗経験から自己像が危機的状况に陥ることも決して少なくない。また、自己を大きく揺るがされることの多い青年期だからこそ、その自己像を肯定的色彩に保ち続けたい欲求は更に鮮明にもなってくる。そのため、青年たちは「自分は価値ある存在」との認識を確保するために、自分なりの方法で様々な努力的対処を試みる。しかし、このような対処は、自分自身が置かれている文脈によっては、功を奏する場合もあれば、逆に裏目に出る場合もある。例え本人が現状の打破を強く意図した対処だとしても、必ずしも全てが精神的健康の保持・増進に資するとは限らない。本研究では、自分に価値を見出したいと願う（個人的資質としての要因）青年たちが、どのような努力を行う（対処方略）ことが望ましいのか、それが青年期発達における重要な人間関係である、友人関係での適応性にどのような影響を与えるのか検討することを目的とする。

まず、青年たちの個人的資質の要因として、青年期の特徴とも言われる自己愛傾向を取り上げる。自己愛傾向は、自分自身への関心の集中、自信や優越感などの自分に対する強い肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求（小塩, 1998）として定義されている。これは、自己評価や自己価値をポジティブな状態に保ち続けたいとの個人における動機づけの強さを表すものでもある（Sedikides, 1993）。また、自己評価や自己価値といったものは自分という個の存在だけから規定されるものではない。もちろん自分で自分自身の価値を内的に評価するケースもあるが、他者から受ける外的な評価によっても自己価値は大きく変動することになる。そこで本研究では、もう一つの個人的資質の要因として、反映的自己評価を取り上げることとする。反映的自己評価とは、自分が重要他者（親友、恋人、パートナー、家族など）からどのように評価されているのか、そしてその評価を自分自身がどのように予測しているのかを表す構成概念である。これは、他者からの評価を自分の視点で推測するものであるため、厳密には外的な評価そのものではない。しかし、他者からの眼差しをどのように意識しているのかという他者存在を前提とした指標であるため、内的な評価だけでは判別できない領域にも踏み込めるものである。もちろん、重要他者から肯定的に評価されていると推測できるのであれば、自己像の安定性にとっては強力な基盤になると考えられる。ただ、逆にその重要他者からの評価にさえ疑念を抱いているのであれば、自己像の不安定性はもちろん、一般的な他者関係の構築・維持にも少なからず不安を残すことが予想される。

では、彼らはどのような試み（対処方略）によって、自己価値を維持する努力を実行しているのだろうか。本研究では、自己愛傾向と反映的自己評価といった個人的な資質要因を持つ彼らが、自己評価維持のために試みる対人的な自己調整方略として、安心さがしを取り上げる。安心さがし（reassurance seeking）とは、対人関係のなかで自己価値に対する不安を感じたとき、他者が本当に自分のことを大切に思ってくれているかどうかを重要他者（恋人や

友人など）に対して繰り返し確認する行動を指している（長谷川，2008）。これは、自己像の安定性が脅かされた危機的状況に対し、外的な肯定的評価を補填することで再び安定性を取り戻そうとする努力的な対処と言える。しかし、問題はこの努力的な対処が何度も何度も繰り返されることで相手を疲弊させてしまい、結果として相手からの拒絶を招く可能性を持つ点にある。また、Joiner & Metalsky（1995）では、抑うつ傾向の強い者は安心さがしを頻繁に行い、それが相手側の対人ストレスを高めて相手からの拒絶を招くが、非抑うつ的な者が行う安心さがしは、他者からの拒絶を引き起こさなかったことが示されている。このように、安心さがしは、本人の意図とは逆に相手からの拒絶を招く性質を持つと同時に、個人の文脈によっては、自己評価の維持に功を奏する場合や、裏目に出る場合などの様々なパターンを見せることが考えられる。

では、自己愛傾向者における安心さがしは、友人関係にどのような影響を見せるのであろうか。青年にとっての友人関係は、互いにとっての安全基地でありながら互いに切磋琢磨する重要な関係でもあるため、友人関係の充実が精神的健康の維持に欠かせないものである。本研究では、この友人関係における適応性として居場所感、不適応性として他者依存性を取り上げることとする。石本（2010）は、家族・友人・クラス・恋人などの各対象との関係性において「ありのままでいられる」ことや「相手の役に立っていると思える」という感覚から居場所感を捉えている。その中でも、友人との関係性における居場所感が満たされていることは、自己受容や充実感などの自己肯定意識の安定につながることを示されている。

次に、他者依存性とは、その根底に養護的・支持的な関係を獲得し維持したいという強い欲求を慢性的に持つこと（福岡，2003）とされている。福岡（2003）は、他者依存性が高い人々は、ソーシャル・サポートを自分に与えてくれる人々に対する満足度が低く、ストレス評価もネガティブになるため、自分の心理的苦痛が増幅されることを示している。このように、他者依存性は、自己の主體的な姿勢に著しく欠けるため、他者に対する感謝の念が希薄になりやすく、自分の日常生活をより窮屈なものにさせる危険性を孕んでいる。

本研究では、自己愛傾向と反映的自己評価との個人的資質を持つ青年たちが、重要他者（最も親しい同性の友人）に対して試みる安心さがしによって、居場所感や他者依存性といった友人関係における適応性、不適応性にどのような影響を及ぼすのか検証することを目的とする。予想される結果としては、まず自己愛傾向が高く、反映的自己評価が高い場合は、安定した肯定的自己像を持つことが推測されるため、安心さがしによって更に外的資源からの肯定的評価を効果的に収集し、適応性の増進に寄与させていることが考えられる。しかし、反映的自己評価が低い場合には、自己像が対人的ストレスへの脆弱性を持つことが推測されるため、安心さがしが逆に自分自身の不安定性をより鮮明にさせる効果を持つことが考えられる。また、自己愛傾向が低い場合は、自己価値を何としてでも肯定的かつ安定的に維持したいという欲求そのものが弱いと、反映的自己評価や安心さがしに関わらず、中程度の適応性を維持し続けていることが予想される。

方 法

調査参加者と手続き：A 県内の大学生215名（平均年齢は19.1歳， $SD = 1.19$ 歳，男性：142名，女性：73名）を対象に無記名，集団形式で実施された。また，調査への回答は全くの任意であり，不快な思いをした場合にはいつでも回答を中止できること，また中止をしたことで何らかの不利益をこうむることはない，ということを事前に丁寧に説明を行った。

1) 自己愛傾向尺度：清水・川邊・海塚（2008）による対人恐怖心性－自己愛傾向2次元モデル尺度のうち，誇大性について測定する自己愛傾向領域の10項目（ex. 私は，才能に恵まれた人間であると思う）を用い，7段階（全然あてはまらない“1”～非常にあてはまる“7”）にて回答を求めた。なお，この10項目は小塩（1998）による Narcissistic Personality Inventory Short-version（NPI-S）から抜粋されたものである。

2) 他者依存性尺度：Hirschfeld, Klerman, Gough, Barrett, Korchin, & Chodoff（1977）による他者依存性尺度の邦訳版から15項目（Emotional Reliance と Lack of Social Self-Confidence の2領域）を抜粋し，4段階（そうでない“1”～非常にそうである“4”）にて回答を求めた（ex. 他の誰よりも私のことをいつも優先してくれる人が私には必要である）。

3) 居場所感尺度：石本（2010）による居場所感尺度を用いた。本尺度は，家族や友人といった関係性ごとにどの程度その関係性を自分の居場所だと感じられるのかについて測定するものである。本研究では，友人との関係性に焦点をあてることから，「以下の項目について，友人と一緒にいるときのあなたにどの程度あてはまるかについて教えてください」との教示を行った後，各質問項目に回答してもらった。13項目（ex. 自分が必要とされていると感じる）について5段階（あてはまらない“1”～あてはまる“5”）にて評定を求めた。

4) 安心さがし尺度：長谷川（2008）による安心さがし尺度を用いた。回答前の教示として「友人関係において，友人が自分のことを本当に理解していないと感じたり，自分のことを大切に思っていてくれるかどうか気がなったりすることが，少なからずあると思います。最も親しい同性の友人との関係のなかで，そのような気持ちになった時，あなたはどのような行動や反応をしますか」との文章を用いた。その後，8項目（ex. 自分のことを相手が見放したかと思い，評価の真意について相手に聞く）について5段階（まったくあてはまらない“1”～非常にあてはまる“5”）にて回答を求めた。

5) 反映的自己評価尺度：長谷川（2008）による反映的自己評価尺度を用いた。これは，自分と他者との関係において，当該他者が自分に対してどのような自己評価を行っているのか，それを自分自身がどのように推測しているのかを測定する尺度である。本研究では，「最も親しいと思う同性の友人からどのように思われているのかを想像してお答え下さい」との教示の後，各質問項目に回答してもらった。10項目（ex. 少なくとも人並みには価値のある人間である，と思われている）について5段階（あてはまらない“1”～あてはまる“5”）にて評定を求めた。

なお，本研究において4) 安心さがし尺度と5) 反映的自己評価尺度は，重要他者に限定する内容であったため，調査参加者にとっての“最も親しい同性の友人”を思い浮かべてもらい，その上で回答してもらう必要があった。そのため，両尺度に回答してもらう前に，その

重要他者の名前のイニシャルを記述してもらうことによって、より具体的な人物を想起するなかで回答に臨んでもらうよう工夫を行った。

結 果

各測定尺度についての基礎的検討

まず、各測定尺度について因子分析（主因子法－Promax 回転）を実施した。その結果、自己愛傾向尺度、安心さがし尺度、反映的自己評価尺度については、固有値の減衰状況から 1 因子パターンが最適であると判断された。

また、他者依存性尺度においては因子負荷量の低い 4 項目を除外した上で再度因子分析を行った結果、2 因子パターンが最適であると判断された。第 1 因子は、自分ひとりでは自信がなくて物事の判断ができず、何でも他人の決定事項に従う行動傾向が示されていることから「集団追随」と命名された。第 2 因子は、自分にとって必要な人間がいなくなってしまう状況への漠然とした不安や、常に信頼できる他者に寄り添ってもらいたい欲求を示すことから「他者依存性」と命名された。

そして、居場所感尺度では固有値の減衰状況から 2 因子パターンが最適だと判断された。第 1 因子は、ありのままでいられる、自分らしくいられるといった意味内容から石本（2010）と同様に「友人本来感」と命名された。第 2 因子は、自分が友人に必要とされている、役に立っていると思えるといった意味内容から石本（2010）と同様に「友人自己有用感」と命名された。

Table1 に各測定尺度の基礎統計量と α 係数、および各変数間の相関係数を示した。 α 係数については、.74～.90 の範囲にあることから全測定尺度における一定の内的整合性が確認された。したがって、以後の分析では全測定尺度を用いることとした。また、自己愛傾向と安心さがしと反映的自己評価の 3 変数間における相関係数はいずれも小さな ($|r| = .13 \sim .23$) 値であり、ほぼ無相関関係にあることが示された。また、居場所感と他者依存性の各 2 下位尺度については、相関係数の値は小さいものの互いに負の関係にあることが示された。項目内容から考えると、居場所感が友人関係における適応性を示すのに対し、他者依存

Table1 各変数間における相関係数および、各変数の平均値、標準偏差、 α 係数

	自己愛傾向	安心さがし	反映的 自己評価	友人本来感	友人自己 有用感	集団追随	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
自己愛傾向	—						27.03	7.29	.86
安心さがし	.13	—					18.01	6.80	.90
反映的自己 評価	.20*	-.23*	—				36.21	5.73	.82
友人本来感	.29*	-.11	.37*	—			19.20	4.91	.81
友人自己 有用感	.45*	.07	.34*	.35*	—		20.69	4.36	.85
集団追随	-.28*	.10	-.27*	-.32*	-.17*	—	10.42	3.32	.75
他者依存性	.10	.27*	-.16*	-.28*	-.13	.30*	11.85	3.50	.74

* $p < .05$

性が友人関係における不適応性を示していると考えられる。

交互作用項を含む 3 要因の階層的重回帰分析

本研究では、自己愛傾向と反映的自己評価（個人的資質としての要因）と安心さがし（対処方略）が友人関係に関連した適応性にどのような影響を与えるのかを検討することが目的であった。そのため、自己愛傾向・反映的自己評価・安心さがしの 3 変数を独立変数とし、他者依存性と居場所感の各下位尺度を従属変数とした交互作用項を含む 3 要因の階層的重回帰分析を行った。Step1 に自己愛傾向、反映的自己評価、安心さがしの主効果項を投入し、Step2 には 1 次の交互作用項を、Step3 には 2 次の交互作用項を投入した。

その結果、居場所感における友人本来感（ $\Delta R^2 = .038$ $F(1, 207) = 10.11$ $p < .05$ ）、友人自己有用感（ $\Delta R^2 = .014$ $F(1, 207) = 4.11$ $p < .05$ ）において有意な 2 次の交互作用項が示された（それぞれ Table2 と Table3）。また、他者依存性においては集

Table2 自己愛傾向と反映的自己評価と安心さがしが友人本来感に及ぼす影響

	Step1	Step2	Step3
(切片)	19.200*	19.088*	19.009*
自己愛傾向	.156*	.155*	.208*
反映的自己評価	.259*	.255*	.190*
安心さがし	-.048	-.052	-.087 +
自己愛傾向×反映的自己評価		.010	.016 +
反映的自己評価×安心さがし		.000	-.005
安心さがし×自己愛傾向		.005	.004
自己愛傾向×反映的自己評価×安心さがし			.004*
ΔR^2	.184*	.007	.038*
R^2	.184*	.191*	.228*

+ $p < .10$ * $p < .05$

Table3 自己愛傾向と反映的自己評価と安心さがしが友人自己有用感に及ぼす影響

	Step1	Step2	Step3
(切片)	20.693*	20.801*	20.843*
自己愛傾向	.226*	.209*	.180*
反映的自己評価	.218*	.227*	.262*
安心さがし	.058	.071 +	.090*
自己愛傾向×反映的自己評価		.003	-.001
反映的自己評価×安心さがし		.009	.012 +
安心さがし×自己愛傾向		-.008	-.008
自己愛傾向×反映的自己評価×安心さがし			-.002*
ΔR^2	.275*	.016	.014*
R^2	.275*	.291*	.305*

+ $p < .10$ * $p < .05$

団追随 ($\Delta R^2 = .040$ $F(1, 207) = 10.09$ $p < .05$) に有意な 2 次の交互作用項が (Table4), 他者依存性 ($\Delta R^2 = .037$ $F(1, 211) = 9.02$ $p < .05$) では自己愛傾向と反映的自己評価における有意な 1 次の交互作用項が示された (Table5)。そして Aiken & West (1991) を参照し, 1 次あるいは 2 次の交互作用項における $+1SD$ および $-1SD$ の値を代入した単回帰直線を Figure1 ~ 4 に示した。

まず, Figure1 に友人本来感における単回帰直線の結果を示した。自己愛傾向が低く ($-1SD$) かつ反映的自己評価が高い ($+1SD$) 場合においては, 安心さがしを頻繁に行うことで友人本来感の低下につながる事が示された ($\beta = -.41$ $t(207) = 2.64$ $p < .05$)。そして, 自己愛傾向が高く ($+1SD$) かつ反映的自己評価が低い ($-1SD$) 場合においては, 安心さがしを頻繁に行うほど友人本来感の低下につながる可能性が示された ($\beta =$

Table4 自己愛傾向と反映的自己評価と安心さがしが集団追従に及ぼす影響

	Step1	Step2	Step3
(切片)	10.423*	10.314*	10.369*
自己愛傾向	-.112*	-.101*	-.138*
反映的自己評価	-.115*	-.122*	-.077 +
安心さがし	.044	.033	.057 +
自己愛傾向 × 反映的自己評価		.003	-.001
反映的自己評価 × 安心さがし		-.003	.001
安心さがし × 自己愛傾向		.008 +	.009*
自己愛傾向 × 反映的自己評価 × 安心さがし			-.002*
ΔR^2	.131*	.014	.040*
R^2	.131*	.145*	.185*

+ $p < .10$ * $p < .05$

Table5 自己愛傾向と反映的自己評価と安心さがしが他者依存性に及ぼす影響

	Step1	Step2	Step3
(切片)	11.847*	11.949*	11.961*
自己愛傾向	.048	.066 +	.058
反映的自己評価	-.081 +	-.081 +	-.071
安心さがし	.117*	.113*	.118*
自己愛傾向 × 反映的自己評価		-.015*	-.016*
反映的自己評価 × 安心さがし		-.003	-.002
安心さがし × 自己愛傾向		.000	.000
自己愛傾向 × 反映的自己評価 × 安心さがし			-.001
ΔR^2	.094*	.037*	.002
R^2	.094*	.131*	.132*

+ $p < .10$ * $p < .05$

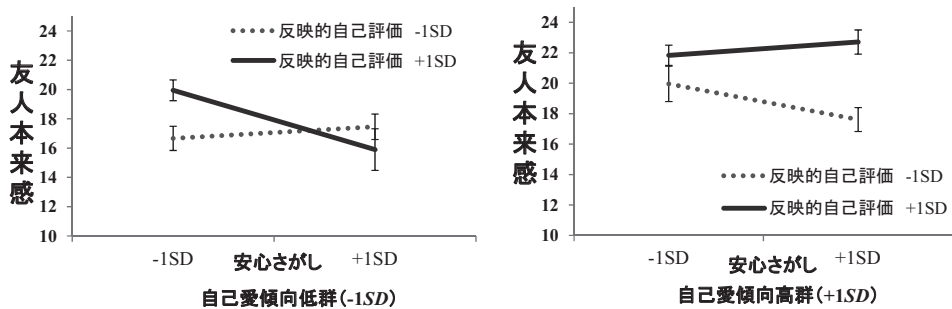


Figure1 自己愛傾向と反映的自己評価と安心さがしが友人本来感に与える影響

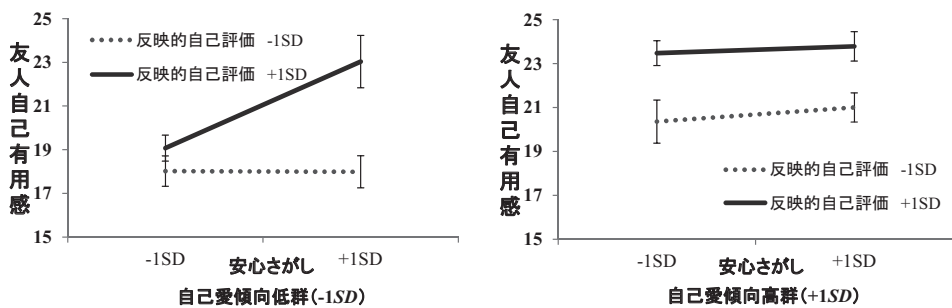


Figure2 自己愛傾向と反映的自己評価と安心さがしが友人自己有用感に与える影響

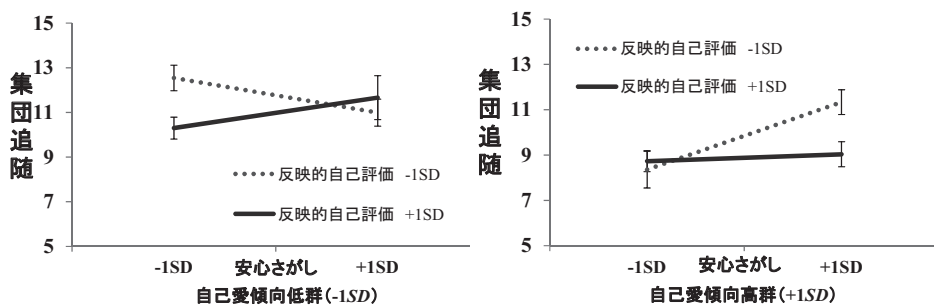


Figure3 自己愛傾向と反映的自己評価と安心さがしが集団追従に与える影響

-.24 $t(207) = 1.84$ $p < .10$ 。

次に、Figure2に友人自己有用感における単回帰直線の結果を示した。自己愛傾向が低く ($-1SD$) かつ反映的自己評価が高い ($+1SD$) 場合において、安心さがしを頻繁に行うことで友人自己有用感は増加することが示された ($\beta = .46$ $t(207) = 3.06$ $p < .05$)。

また、Figure3に集団追従における単回帰直線の結果を示した。自己愛傾向が低く ($-1SD$) かつ反映的自己評価も低い ($-1SD$) 場合においては、安心さがしを頻繁に行うことで集団追従の低下につながる可能性が示された ($\beta = -.23$ $t(207) = 1.81$ $p < .10$)。そして、自己愛傾向が高く ($+1SD$) かつ反映的自己評価が低い ($-1SD$) 場合においては、安心さがしを頻繁に行うことで集団追従の増加につながることを示された ($\beta = .45$ t

(207) = 3.35 $p < .05$ 。

最後に、Figure4 に他者依存性における単回帰直線の結果を示した。自己愛傾向が高い (+1SD) 場合においては、反映的自己評価が高くなると他者依存性は低減することが示された ($\beta = -.28$ $t(211) = 4.16$ $p < .05$)。

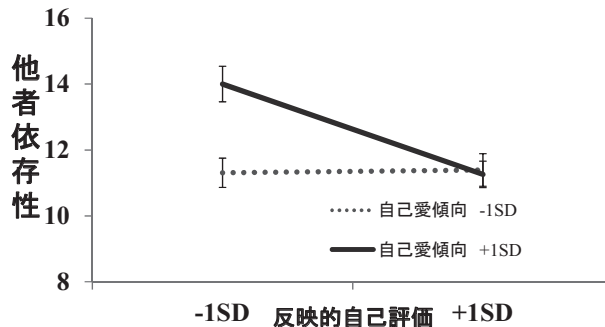


Figure4 自己愛傾向と反映的自己評価が他者依存性に与える影響

考 察

本研究の目的は、自己愛傾向と反映的自己評価という個人的な資質を持つ人々が、安心さがしという対処を試みることで、友人関係における適応性がどのような影響を受けるのかについて検討することであった。以下において、Figure1 から Figure4 までの結果を総合しながら考察を行ってゆく。

まず、自己愛傾向が高く、反映的自己評価が低い人々、つまり自己像において肯定的評価を維持したいとの強い動機づけを持ち、重要他者でさえ自分のことを高くは評価していないとの疑念を持つ人々について整理をしてゆく。彼らが重要他者に対して繰り返し自己価値の確認行動を行った場合、集団追随は増加を見せ、友人本来感については低下を見せている。これは自己像の修復を意図して安心さがしを行うものの、結果的に得られるものは、自分の意見を持つことに対して自信が持てなくなる、あるいは友人集団内でありのままの自分である安心感が希薄になるなど、本来の意図とは逆に不適応的な方向に舵が切られていることを示唆している。これは、Figure4 に示されているように、自己愛傾向が高く、かつ反映的自己評価が低い場合は、他者依存性が高くなることから支持されるものである。彼らは、たとえ安心さがしを行ったとしても一時的な満足感しか得られないため、何度も何度も繰り返さざるを得ないことになり、そのために主体的な自信の喪失、友人関係の中であつても気を遣わざるを得ない状況に陥っていると考えられる。

小塩 (2001) は、自己愛傾向と日常の自尊感情レベル (6 日間連続で測定された個人内の自尊感情の平均値) および日常の自尊感情変動性 (6 日間連続で測定された個人内の自尊感情の標準偏差) の関連について検討している。その結果、自己愛傾向の高さが日常の自尊感情レベルの増加につながり、直接あるいは自己像の不安定性を媒介しながら自尊感情変動性の高さにも影響を及ぼしていた。これは、自己愛傾向の高さが、高い自尊心を常に維持した

いという強い欲求につながり、もともと自己像の不安定さも手伝って、日によって自尊心が激しく変動してしまう姿を表すものである。このように自己愛傾向が高く、反映的自己評価が低い状態の人々が、浮き沈みの激しい自己評価を何度も再確認することで修復を図ることは、結果として友人関係のなかで自分自身をより窮屈な状況に追い込んでいる可能性が見て取れる。彼らにとって安心さがしは、個人の資質的要因という文脈上、機能的な対処方略とは言い難いものであり、自己像の修復には、安心さがし以外の方略を採用することが望ましいと考えられる。このことは予想される結果として当初想定していたもののうち、自己愛傾向が高く、かつ反映的自己評価が低い場合については概ね支持されるものであった。しかし、自己愛傾向が高く、かつ反映的自己評価も高い場合においては支持されなかった。Figure1～4の結果を見ると、彼らの適応性は概して安定した様相を呈しており、それは安心さがしという対処によって左右されるものではないことが推測される。この点については、今後においてより詳細な検討が必要になるとと思われる。

次に、自己愛傾向が低く、反映的自己評価が高い人々、つまり自己像において肯定的評価を維持することにさほど執着するわけではなく、重要他者から高い評価を受けているとの信頼感を持った人々について整理をしてゆく。彼らが重要他者に対して繰り返し自己価値の確認行動を行った場合、友人本来感については低下を見せるものの、友人自己有用感については逆に増加を見せていた。友人本来感も友人自己有用感のいずれも友人関係における適応性を表す構成概念ではあるが、自分が友人の役に立っているとの自信の醸成には一役買うものの、友人関係のなかであっても気遣いをせざるを得ない状況が示唆されている。これは、彼らは自己像の修復にはさほど強い興味を持っておらず、少なくとも重要他者からは高い評価を受けていることが担保されているため、他者からの拒絶を誘発させるような安心さがしには至っていないことが予測される。これは、同様に自己愛傾向が低いものの、反映的自己評価においても低さを見せる人々が、安心さがしを試みることによって不適応性である集団追従が改善されている (Figure3) ことから支持される。彼らにとって安心さがしは、自己価値を補填するために一定の有効性を発揮している対処方略であり、友人の役に立っている、あるいは自分独自の考えに自信が持てるなどの主体的な存在であることの確認作業として機能していることが考えられる。ただし、自己愛傾向の低さは自尊心における変動性の低さに影響 (小塩, 2001) することを踏まえると、日常生活において失敗する可能性を持つ場面そのものを回避していることや、失敗経験について深く内省しない傾向を持つことも考えられる。そのため、積極的に自己探求を行わないことから、漫然と友人関係のなかに所属し、その集団内においてありのままの自分を感じることができず埋没している可能性も十分に想定される。このことは当初想定していた結果とは異なるものであり、自己愛傾向が低い人々においても、安心さがしという努力的対処は適応性に対して様々な影響を与えていることが示されていた。

このように、同じ安心さがしという対人的な自己調整方略であっても、高自己愛傾向者と低自己愛傾向者といった文脈に差を持つ場合、前者においてはより深刻かつ非機能的な結果に陥る可能性を含んでおり、後者においては一定の有効性を持つ可能性が示されている。

しかし、本研究における居場所感や他者依存性の変化は、安心さがしを試みた後の即時的結果によるものなのか、あるいは長期的結果によるものなのかは判別ができない。仮に即時

的结果として適応的な反応を示すものの、長期的結果としては不適応的な反応に終止しているのであれば、それは非機能的な対処方略であると言わざるを得ない。今後は、安心さがしの実行後における即時的効果と長期的効果の弁別が重要になってくことや、安心さがしの具体的な頻度および安心さがしに至る具体的な意図についても詳細な検討が必要になってくると思われる。

また本研究はワンショットの調査研究であるため、独立変数を自己愛傾向や反映的自己評価および安心さがしとして、従属変数を居場所感や他者依存性として設定しているものの、この因果関係の方向性は明確に断言できるものではない。そのため、今後においては、パネル調査あるいは実験の手法による詳細な検討が求められることになる。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Newbury Park, CA: Sage.
- 福岡欣治 (2003). 他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすソーシャル・サポートの影響 対人社会心理学研究, 3, 9-14.
- 長谷川孝治 (2008). 自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知に及ぼす影響 信州大学人文科学論集 (人間情報学科編), 42, 53-62.
- Hirschfeld, R. M., Klerman, G. L., Gough, H. G., Barrett, J., Korchin, S. J., & Chodoff, P. (1977). A measure of interpersonal dependency. *Journal of Personality Assessment*, 41, 610-618.
- 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286.
- Joiner, T. E., & Metalsky, G. I. (1995). A prospective test of an integrative interpersonal Theory of depression: A naturalistic study of college roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 778-788.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- Sedikides, C. (1993). Assessment, enhancement, and verification determinants of the self-evaluation process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 317-338.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性—自己愛傾向 2 次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, 16, 350-362.

(2018年10月31日受理, 12月4日掲載承認)